

# 社会医学研究レター

Vol. 4 No.1, 2 合併号 1994年 7月

編集・発行

社会医学研究会事務局（大津市瀬田月輪町 滋賀医大予防医学講座内）

京都総会ご参加を、心からお待ちしています

第35回社会医学研究会総会 企画運営委員会 代表委員 千田 忠男

第35回社会医学研究会総会が、いよいよ開催できる運びとなりました。全国の会員の皆様のご参加を、企画運営委員会一同からお待ちしています。

さて、これまで準備してきた今回の総会は、次のような特徴をもつと考えています。

1. 重点とする分野として、(1)福祉・医療領域、(2)学校保健領域、(3)地域保健領域、(4)労働衛生領域の4つの分野を想定し、それぞれの柱をねりあげ、ふさわしい演題を応募していただくようお願いしてきました。あわせて、広い分野から、多彩な課題とそれにふさわしい企画を募ってきました。

その結果、皆様のご尽力により、基調講演と特別講演をそれぞれひとつ、シンポジウム3件、演題37題、自由集会3件の企画を予定できました。そうした企画でプログラムを編成することができ、講演要旨の抄録集も、水準の高い大部な分量となりました。

まずは同封してあるプログラムをご覧いただき、さらには総会参加前に抄録集に目を通していただければ幸いと存じます。抄録集は、7月10日すぎにはみなさまのお手元にお届けできるよう準備しています。

2. 発表会場を5カ所確保し、1演題あたり30分の時間を設定することで、発表をゆったりとを行い、討論もより活発にできるだけやりやすいように心がけました。十分な発表と活発で実りある討論が行なわれるよう期待いたします。

3. 福祉・医療領域で、従来以上に多くの演題の応募がありました。そのうち聴覚障害にかかわる一連のテーマについて、自らが障害を持ちながらも、福祉・医療で実践的に取り組まれ

ている会員より演題が出されました。そこで、企画運営委員会としては、京都市と関係諸機関のご協力を得て、全日程にわたって手話通訳を配し、十分な討論ができるよう準備いたしました。ご関係の皆さまにあらためて御礼申し上げます。

4. 学校保健領域は、質量とも充実するよう特段の努力をするよう企画段階から申し合わされ、それにふさわしい努力がなされてきました。その結果、6題の演題を応募いただき、自由集会も企画することができました。この領域の社会医学研究が、これからさらに発展していくものと確信いたします。

5. 地域保健領域では、衛生公衆衛生の原点と、現在の焦点になっている地域保健法とを同じ視野にいれた企画を用意しました。すなわち特別講演、シンポジウム、自由集会、4演題発表という流れができるように工夫してみました。十分なご討論を期待いたします。

6. 労働衛生領域では、焦眉の課題になっている「過労死」問題の解決をはかるために、これまでの社医研での討論を総括できる水準にしようという意気込みで、企画が立てられています。また、「過労死」問題にかかる方々が当日会員として参加されることが見込まれています。

7. 以上の企画の準備をすすめるために、企画運営委員会はこれまでに7回の会議を行い、20数人がかかわってきました。またその過程で研究会に入会される方も多数見られました。

会員のみなさまの多数の方々のご参加と、熱気あふれ実り豊かなご討論とを、企画運営委員会一同、心から期待しております。

総会会場でお会いできることを待ちしております。

## 追悼

# 西尾雅七先生を偲ぶ

(奈良医大・衛生 山下 節義)

西尾雅七先生は、1994年5月14日肝硬変のためご逝去されました。享年84才でした。

先生は、1909年兵庫県多紀郡丹南町でお生まれで、1927年に兵庫県立鳳鳴中学校、1931年東京高等学校をご卒業となり、1931年京都帝国大学医学部医学科にご入学になりました。東京高校在学中に東京市電の争議支援で停学処分を受けられたため、教師から東大は無理だと京大進学を勧められたためと先生は何時かお話しになっておられました。

1935年、京大医学部をご卒業になり、直ちに衛生学教室にお入りになり、助手、講師をへて1940年には助教授になっておられます。戦後、公衆衛生学教室が創設されたのにともない1949年に初代教授に就任され、1973年に定年により退官され、京大名誉教授の称号を受けておられます。先生は24年間にわたり公衆衛生学講座を担当され、その間に多くの人材を育て世に送りだされています。先生がかつてお酒をお飲みになるとよく口にされたのは、「俺は博労だ、名馬を育て世に送り出すのが仕事だ」とのお言葉でした。

15年戦争の時代、先生は陸軍に2度召集されておられます。始めは中国の大別山方面へ派遣され、2度目には内地勤務で陸軍病院関係勤務との事でした。1943年に大学要員として復学命令がだされて召集解除となり、戦争末期には京大在郷軍人会分会長となられたことは知る人ぞ知る語り草となっていますが、その頃の先生のご心境はいかがでしたでしょうか、ついにお尋ねする折もないままとなっていました。

西尾先生が手掛けられた研究分野は、多岐にわたりますが大きく分けて3期に区分することができます。第1期は、公衆衛生の教授に就任されるまでの衛生学教室の時代です。この頃は主として、栄養問題（VB<sub>1</sub>・VC等の必要量、妊娠婦のB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>代謝、農業労働等のRMR等）を中心に住環境問題等も手掛けでおられました。第2期は、

公衆衛生の教授就任以来1960年に英国へ出張されるまでの時期です。この頃は、労働衛生問題（鉛、CS<sub>2</sub>、PCB、有機溶剤、高温環境、騒音、疲労等）を中心に取り組まれていましたが、医療保障関係（例えば、国保の公衆衛生学的効用とか、健保医療に関する社会医学的研究等といった研究が世に出されています）、母子保健（乳児死亡等）なども手掛けておられました。1949年には日本ビタミン学会賞を受賞しておられます。また、この頃の先生のご指導は大変に厳しいものがあったと先輩の先生方から聞かされたことがあります。何故か第3期ともなると先生はソフトな雰囲気になっておられました。

第3期は、1960年英國出張からお帰りになってから退官されるまでの時期です。主要には、医療問題（かかりつけ医制度、医療供給体制、患者の受療行動を通してみた病診関係等）、高齢者保健問題、母子保健問題（未熟児出生の社会経済的因素等）、結核・障害者問題、保健婦問題、地方自治と公衆衛生等の諸問題が取り上げられていました。第3期の頃には、当時公衆衛生行政に関わっていた医師や保健婦が少なからず教室出入りして、先生の指導の下に調査研究にかかわるといった状況が見られていました。

その間、大学行政にも尽力され、京都大学評議員や学生部長にもなっておられます。この頃の京大は学生運動が盛んな時代でありましたから、学生部長として「大学の自治」擁護と「暴力否定」とで大層なご苦心を払われておられました。当時、先生のご苦心の作である“西尾メモ”なるものがあり、大学の自治の観点から、「警察が入る時の条件」について取りまとめられた内容だったと言われています。ついに歌を歌うことのなかった先生ですが、この頃はめずらしく酒の席でお酔いになるとよく流行歌を歌っておられました。このんで口にしておられたのが当時流行していた「愛しちゃったのよ・・」「バラが咲いた・・」

という歌ですが、おそらく当時の先生のご心境の一端を託しておられたに違いありません。

先生は、度々海外へもでかけておられます。既に、先の15年戦争の間にも軍役とは別に中国の東北地区にでかけられていますが、公衆衛生教授の時代には、英國出張を始めとして、米国、オランダ、オーストラリア、ニュージーランドや東南アジア各国に度々でかけておられました。

終戦末期のエピソードとして、日本学術研究会議栄養率研究委員会委員として「職種別・性別所要熱量、所要蛋白量、栄養効率の増進の方策」をテーマに、手回し計算機を用いて「昭和21年以降の日本人の国民必要食糧の算出」に従事されましたが、そのご苦労なさった結果を報告書にまとめて、1945年8月1日京都から途中米軍艦砲射撃を受けながら24時間かけて東京へ持参し当時医療団総裁だった戸田正三先生に手渡されたところ、戸田先生は「やっぱりこれほどいるのか。そうすると、これはとても戦争なんかできる状況じゃないな」といわれたというものがあります。栄養問題の量的な面から戦争遂行が不可能であることを証明されたわけです。また、終戦後の混乱期、助教授の時代に、「日本人のB<sub>1</sub>必要量の研究」を吉田克巳先生（元三重大教授）や橋本先生（元吉祥院病院長）、片桐先生（故人）等当時の学生の協力を得て、彼等を被験者に京大病院のベッドを使ってB<sub>1</sub>欠乏実験を行なわれたというのも有名な話です。

更には、当時の学生社医研の学生達と国鉄の蒸気機関車に乗込んで、逢坂山トンネルにもぐり、当時問題となっていた機関手のCO中毒問題の調査に当たられたというお話を聞いております。また、1950年代半ば頃から部落問題に关心を持つ学生や学生OBが未開放部落に診療所をつくり維持する取り組みがされておりましたが、先生はこうした動きを積極的に支援され、時に現場へでかけられたりされたこともあります。

西尾先生は、1960年の全国社会医学研究会の創設に参加されましたが、翌年1961年に、自ら京都社会医学研究会創設を旗揚げされ、その代表として社会医学研究の先頭にたたかれています。西尾先生は、当時は「実験室から研究の場を社会に移さなければならぬと考えるよう」なり「我が国の医療供給体制の問題点を解明すべく調査研究をはじめ」た頃だったと語っておられました。この間、14年余りにわたり、機関誌「社会医学研究」が発行されていますが、西尾先生のご退官とともにこの誌名は、全国社会医学研究会の機関誌に引き継がれ今日に至っております。

ご在職中、先生は、産業衛生学会、公衆衛生学会、全国社会医学研究会等学会を度々開催されましたし、1967年からご退官まで日本衛生学会の幹事長として学会の運営・発展にご尽力されました。日本公衆衛生学会、日本衛生学会、日本産業衛生学会の名誉会員でもあります。こうした学会活動も関わって、1966年には第7期の日本学術会議会員に選出され、以来1974年まで3期にわたって任務につかれておりますが、先生は「学問思想の自由」委員会に所属され活躍されました。

西尾先生は様々な研究領域で活躍される傍ら、大学・学会行政等でも活躍されましたが、その他に公衆衛生行政の分野でも活躍しておられます。

京都府関係では、医療機関整備審議会、公害対策審議会、高齢者福祉対策協議会等々、京都市関係では、国民健康保険運営協議会、医療施設審議会、市民の健康と福祉に関する計画委員会、地域保健・医療協議会等々といった各種の審議会、協議会の代表を務められ、或いは、京都府の公害衛生研究所や京都市の衛生研究所の所長を兼務される等の活躍をされていましたし、この間、京都府・京都市の専門委員を永らく務められ、府政・市政を公衆衛生の専門家として支えてこられました。1979年には、京都府市町村保健婦協議会顧問にも就任しておられます。

先生を語る時、今一つ重要な事項として森永ミルク中毒事件への関わりの問題があります。1969年阪大・丸山博先生等の「14年目の訪問」の公衆

という歌ですが、おそらく当時の先生のご心境の一端を託しておられたに違いありません。

先生は、度々海外へもでかけておられます。既に、先の15年戦争の間にも軍役とは別に中国の東北地区でかけられていますが、公衆衛生教授の時代には、英國出張を始めとして、米国、オランダ、オーストラリア、ニュージーランドや東南アジア各国に度々でかけておられました。

終戦末期のエピソードとして、日本学術研究会議栄養能率研究委員会委員として「職種別・性別所要熱量、所要蛋白量、栄養効率の増進の方策」をテーマに、手回し計算機を用いて「昭和21年以降の日本人の国民必要食糧の算出」に従事されましたが、そのご苦労なさった結果を報告書にまとめて、1945年8月1日京都から途中米軍艦砲射撃を受けながら24時間かけて東京へ持参し当時医療団総裁だった戸田正三先生に手渡されたところ、戸田先生は「やっぱりこれほどいるのか。そうすると、これはとても戦争なんかできる状況じゃないな」といわれたというものがあります。栄養問題の量的な面から戦争遂行が不可能であることを証明されたわけです。また、終戦後の混乱期、助教授の時代に、「日本人のB<sub>1</sub>必要量の研究」を吉田克巳先生（元三重大教授）や橋本先生（元吉祥院病院長）、片桐先生（故人）等当時の学生の協力を得て、彼等を被験者に京大病院のベッドを使ってB<sub>1</sub>欠乏実験を行なわれたというのも有名な話です。

更には、当時の学生社医研の学生達と国鉄の蒸気機関車に乗込んで、逢坂山トンネルにもぐり、当時問題となっていた機関手のCO中毒問題の調査に当たられたというお話を聞いております。また、1950年代半ば頃から部落問題に関心を持つ学生や学生OBが未開放部落に診療所をつくり維持する取り組みがされておりましたが、先生はこうした動きを積極的に支援され、時に現場へでかけられたりされたこともあります。

西尾先生は、1960年の全国社会医学研究会の創設に参加されましたが、翌年1961年に、自ら京都社会医学研究会創設を旗揚げされ、その代表として社会医学研究の先頭にたたれています。西尾先生は、当時は「実験室から研究の場を社会に移さなければならぬと考えるように」なり「我が国の医療供給体制の問題点を解明すべく調査研究をはじめ」た頃だったと語っておられました。この間、14年余りにわたり、機関誌「社会医学研究」が発行されていますが、西尾先生のご退官とともにこの誌名は、全国社会医学研究会の機関誌に引き継がれ今日に至っています。

ご在職中、先生は、産業衛生学会、公衆衛生学会、全国社会医学研究会等学会を度々開催されましたし、1967年からご退官まで日本衛生学会の幹事長として学会の運営・発展にご尽力されました。日本公衆衛生学会、日本衛生学会、日本産業衛生学会の名誉会員でもあります。こうした学会活動も関わって、1966年には第7期の日本学術會議員に選出され、以来1974年まで3期にわたりて任務につかれておりますが、先生は「学問思想の自由」委員会に所属され活躍されました。

西尾先生は様々な研究領域で活躍される傍ら、大学・学会行政等でも活躍されましたが、その他に公衆衛生行政の分野でも活躍しておられます。

京都府関係では、医療機関整備審議会、公害対策審議会、高齢者福祉対策協議会等々、京都市関係では、国民健康保険運営協議会、医療施設審議会、市民の健康と福祉に関する計画委員会、地域保健・医療協議会等々といった各種の審議会、協議会の代表を務められ、或いは、京都府の公害衛生研究所や京都市の衛生研究所の所長を兼務される等の活躍をされていましたし、この間、京都府・京都市の専門委員を永らく務められ、府政・市政を公衆衛生の専門家として支えてこられました。1979年には、京都府市町村保健婦協議会顧問にも就任しております。

先生を語る時、今一つ重要な事項として森永ミルク中毒事件への関わりの問題があります。1969年阪大・丸山博先生等の「14年目の訪問」の公衆

という歌ですが、おそらく当時の先生のご心境の一端を託しておられたに違いありません。

先生は、度々海外へもでかけておられます。既に、先の15年戦争の間にも軍役とは別に中国の東北地区にでかけられていますが、公衆衛生教授の時代には、英國出張を始めとして、米国、オランダ、オーストラリア、ニュージーランドや東南アジア各国に度々でかけておられました。

終戦末期のエピソードとして、日本学術研究会議栄養能率研究委員会委員として「職種別・性別所要熱量、所要蛋白量、栄養効率の増進の方策」をテーマに、手回し計算機を用いて「昭和21年以降の日本人の国民必要食糧の算出」に従事されましたが、そのご苦労なさった結果を報告書にまとめて、1945年8月1日京都から途中米軍艦砲射撃を受けながら24時間かけて東京へ持参し当時医療団総裁だった戸田正三先生に手渡されたところ、戸田先生は「やっぱりこれほどいるのか。そうすると、これはとても戦争なんかできる状況じゃないな」といわれたというものがあります。栄養問題の量的な面から戦争遂行が不可能であることを証明されたわけです。また、終戦後の混乱期、助教授の時代に、「日本人のB<sub>1</sub>必要量の研究」を吉田克巳先生（元三重大教授）や橋本先生（元吉祥院病院長）、片桐先生（故人）等当時の学生の協力を得て、彼等を被験者に京大病院のベッドを使ってB<sub>1</sub>欠乏実験を行なわれたというのも有名な話です。

更には、当時の学生社医研の学生達と国鉄の蒸気機関車に乗込んで、逢坂山トンネルにもぐり、当時問題となっていた機関手のCO中毒問題の調査に当たられたというお話を聞いております。また、1950年代半ば頃から部落問題に関心を持つ学生や学生OBが未開放部落に診療所をつくり維持する取り組みがされておりましたが、先生はこうした動きを積極的に支援され、時に現場へでかけられたりされたこともあります。

西尾先生は、1960年の全国社会医学研究会の創設に参加されましたが、翌年1961年に、自ら京都社会医学研究会創設を旗揚げされ、その代表として社会医学研究の先頭にたたれています。西尾先生は、当時は「実験室から研究の場を社会に移さなければならぬと考えるよう」なり「我が国の医療供給体制の問題点を解明すべく調査研究をはじめ」た頃だったと語っておられました。この間、14年余りにわたり、機関誌「社会医学研究」が発行されていますが、西尾先生のご退官とともにこの誌名は、全国社会医学研究会の機関誌に引き継がれ今日に至っています。

ご在職中、先生は、産業衛生学会、公衆衛生学会、全国社会医学研究会等学会を度々開催されましたし、1967年からご退官まで日本衛生学会の幹事長として学会の運営・発展にご尽力されました。日本公衆衛生学会、日本衛生学会、日本産業衛生学会の名誉会員でもあります。こうした学会活動も関わって、1966年には第7期の日本学術会議会員に選出され、以来1974年まで3期にわたって任務につかれておりますが、先生は「学問思想の自由」委員会に所属され活躍されました。

西尾先生は様々な研究領域で活躍される傍ら、大学・学会行政等でも活躍されましたが、その他に公衆衛生行政の分野でも活躍しております。

京都府関係では、医療機関整備審議会、公害対策審議会、高齢者福祉対策協議会等々、京都市関係では、国民健康保険運営協議会、医療施設審議会、市民の健康と福祉に関する計画委員会、地域保健・医療協議会等々といった各種の審議会、協議会の代表を務められ、或いは、京都府の公害衛生研究所や京都市の衛生研究所の所長を兼務される等の活躍をされていましたし、この間、京都府・京都市の専門委員を永らく務められ、府政・市政を公衆衛生の専門家として支えてこられました。1979年には、京都府市町村保健婦協議会顧問にも就任しておられます。

先生を語る時、今一つ重要な事項として森永ミルク中毒事件への関わりの問題があります。1969年阪大・丸山博先生等の「14年目の訪問」の公衆

衛生学会での報告を契機に、事件被害者の「恒久救済」を求める運動が各地で再び盛り上がり上がってきた流れを受けて、西尾先生は京都府・市を動かし被害の解明と被害者救済事業への取り組みに全国に先駆けて踏み切らせ、現在のひかり協会設置への重要なきっかけを作られましたが、自らも、京都府・市森永ひ素ミルク中毒追跡調査委員会、京都府・市森永ひ素ミルク飲用者認定委員会の委員長を務められ、その後には、1979年以来財団法人ひかり協会の副理事長、更には曾田長宗先生の後を受けて理事長として、被害者救済事業の発展に大いに尽力されました。事件の解明にどどまらず、被害者救済の具体的な取り組みにも積極的に関わってこられました。先生の門下には、四日市公害の吉田克巳先生、水俣病の北村先生がおられます、自らは森永ミルク中毒事件を手掛けられ、我が国で発生した重大な公害問題3つを西尾一門で手掛けられたことになります。

労働衛生の面でも、1964年以来財団法人京都工場保健会の顧問として、労働衛生の前進に努められましたし、1970年には、労働団体を中心となって作った労働安全衛生研修所の設立発起人、呼びかけ人として、研究所の基礎を作ることに参画しておられます。また、京都では、1973年以来、京都府交通・労働等災害救済事業団の理事長として、1990年まで労働災害・交通事故の問題に関わってこられました。

今一つ、重要なことは、京都市市政研究会の代表者として革新市政実現を目指して市政研究会の代表を務められ、或いは、憲法を暮らしに活かす民主府政を発展させる各界連絡会の呼びかけ人として、更には、住民の暮らしを守る全京都学者・宗教者・文化人の会会长として革新府政・市政发展を目指す取り組みの先頭に立っておられたことです。京都府生協連合会の会長も務めておられます。まさに府民・市民の「生命と暮らし」を守る取り組みに、自らも関わってこられ、革新府政を守るために、杉村知事候補を応援される等、一貫して京都の革新候補を支持され、自ら行動の隊列に加わっておられました。晩年には、日本の平和と

民主主義をめざす京都懇談会呼びかけ発起人あるいは伏見平民懇代表世話人として、「平和と民主主義」の問題にも取り組んでおられました。

先生には、個人的著作のほかに編集監修されたもののが多々ありますが、「国民のための公衆衛生」といった視点から幾つかをあげれば、「人災と健康I」共編（光生館）、「老人問題の今後」編（ミネルヴァ書房）、「人々の健康と社会保障」共編（法律文化社）、「現代の地域保健I, II, III」監修（法律文化社）、「新労働科学論」監修（労働経済社）等があります。

なお、最後になりましたが、西尾先生のご趣味は“魚釣”です。お元気な頃は近畿一円各地にでかけ“釣果”を誇っておられました。今一つは、洋蘭の栽培で、定年で退官される折に門下生一同から贈られた温室で、ご自慢の作品眺めて時に一献かたむけておられたこともあるか伺っています。先生は、お酒をこよなく愛しておられました。昔胃切除の手術を受けられそのおり血清肝炎にかかった経験を持っておられながら、少なからぬ量を嗜んでおられましたが、飲むほどに談論風発で同席の者を楽しませて下さいました。先生は意外に恐妻家でした。このことは知る人ぞ知るですが、先生の親しみやすいお人柄を偲ばせる隠れた一面でもありました。

西尾先生のご経歴やエピソードの一端を紹介しましたが、先生は「象牙の塔に閉じこもり只ひたすら真理探求の学究の徒」に留まることなく、研究の場を実験室から社会のなかに移され、さらには実践の場にも自ら足を踏み入れておられました。常に国民のための公衆衛生を目指して、府民・市民の協力を得て、革新府・市政を支える取り組みにも率先して参加されました。西尾先生の様に幅広い活躍を展開してこられた大学人は他に類を見ることは少なく、また、言行一致の偉大なる存在だったと言えましょう。



衛生学会での報告を契機に、事件被害者の「恒久救済」を求める運動が各地で再び盛り上がり上がってきた流れを受けて、西尾先生は京都府・市を動かし被害の解明と被害者救済事業への取り組みに全国に先駆けて踏み切らせ、現在のひかり協会設置への重要なきっかけを作られましたが、自らも、京都府・市森永ひ素ミルク中毒追跡調査委員会、京都府・市森永ひ素ミルク飲用者認定委員会の委員長を務められ、その後には、1979年以来財団法人ひかり協会の副理事長、更には曾田長宗先生の後を受けて理事長として、被害者救済事業の発展に大いに尽力されました。事件の解明にどどまらず、被害者救済の具体的な取り組みにも積極的に関わってこられました。先生の門下には、四日市公害の吉田克巳先生、水俣病の北村先生がおられます、自らは森永ミルク中毒事件を手掛けられ、我が国で発生した重大な公害問題3つを西尾一門で手掛けられたことになります。

労働衛生の面でも、1964年以来財団法人京都工場保健会の顧問として、労働衛生の前進に努められましたし、1970年には、労働団体を中心となつて作った労働安全衛生研修所の設立発起人、呼びかけ人として、研究所の基礎を作ることに参加しておられます。また、京都では、1973年以来、京都府交通・労働等災害救済事業団の理事長として、1990年まで労働災害・交通事故の問題に関わってこられました。

今一つ、重要なことは、京都市市政研究会の代表者として革新市政実現を目指して市政研究会の代表を務められ、或いは、憲法を暮らしに活かす民主府政を発展させる各界連絡会の呼びかけ人として、更には、住民の暮らしを守る全京都学者・宗教者・文化人の会会長として革新府政・市政発展を目指す取り組みの先頭に立っておられたことです。京都府生協連合会の会長も務めておられます。まさに府民・市民の「生命と暮らし」を守る取り組みに、自らも関わってこられ、革新府政を守るために、杉村知事候補を応援される等、一貫して京都の革新候補を支持され、自ら行動の隊列に加わっておられました。晩年には、日本の平和と

民主主義をめざす京都懇談会呼びかけ発起人あるいは伏見平民懇代表世話人として、「平和と民主主義」の問題にも取り組んでおられました。

先生には、個人的著作のほかに編集監修されたものが多々ありますが、「国民のための公衆衛生」といった視点から幾つかをあげれば、「人災と健康I」共編（光生館）、「老人問題の今後」編（ミネルヴァ書房）、「人々の健康と社会保障」共編（法律文化社）、「現代の地域保健I, II, III」監修（法律文化社）、「新労働科学論」監修（労働経済社）等があります。

なお、最後になりましたが、西尾先生のご趣味は“魚釣”です。お元気な頃は近畿一円各地にでかけ“釣果”を誇っておられました。今一つは、洋蘭の栽培で、定年で退官される折に門下生一同から贈られた温室で、ご自慢の作品を眺めて時に一献かたむけておられたこともあるか伺っています。先生は、お酒をこよなく愛しておられました。昔胃切除の手術を受けられそのおり血清肝炎にかかった経験を持っておられながら、少なからぬ量を嗜んでおられましたが、飲むほどに談論風発で同席の者を楽しませて下さいました。先生は意外に恐妻家でした。このことは知る人ぞ知るですが、先生の親しみやすいお人柄を偲ばせる隠れた一面でもありました。

西尾先生のご経歴やエピソードの一端を紹介しましたが、先生は「象牙の塔に閉じこもり只ひたすら真理探求の学究の徒」に留まることなく、研究の場を実験室から社会のなかに移され、さらには実践の場にも自ら足を踏み入れておられました。常に国民のための公衆衛生を目指して、府民・市民の協力を得て、革新府・市政を支える取り組みにも率先して参加されていました。西尾先生の様に幅広い活躍を展開してこられた大学人は他に類を見ることは少なく、また、言行一致の偉大なる存在だったと言えましょう。



衛生学会での報告を契機に、事件被害者の「恒久救済」を求める運動が各地で再び盛り上がりになってきた流れを受けて、西尾先生は京都府・市を動かし被害の解明と被害者救済事業への取り組みに全国に先駆けて踏み切らせ、現在のひかり協会設置への重要なきっかけを作られましたが、自らも、京都府・市森永ひ素ミルク中毒追跡調査委員会、京都府・市森永ひ素ミルク飲用者認定委員会の委員長を務められ、その後には、1979年以来財団法人ひかり協会の副理事長、更には曾田長宗先生の後を受けて理事長として、被害者救済事業の発展に大いに尽力されました。事件の解明にどどまらず、被害者救済の具体的な取り組みにも積極的に関わってこられました。先生の門下には、四日市公害の吉田克巳先生、水俣病の北村先生がおられます、自らは森永ミルク中毒事件を手掛けられ、我が国で発生した重大な公害問題3つを西尾一門で手掛けられたことになります。

労働衛生の面でも、1964年以来財団法人京都工場保健会の顧問として、労働衛生の前進に努められましたし、1970年には、労働団体を中心となって作った労働安全衛生研修所の設立発起人、呼びかけ人として、研究所の基礎を作ることに参加しておられます。また、京都では、1973年以来、京都府交通・労働等災害救済事業団の理事長として、1990年まで労働災害・交通事故の問題に関わってこられました。

今一つ、重要なことは、京都市市政研究会の代表者として革新市政実現を目指して市政研究会の代表を務められ、或いは、憲法を暮らしに活かす民主府政を発展させる各界連絡会の呼びかけ人として、更には、住民の暮らしを守る全京都学者・宗教者・文化人の会会長として革新府政・市政発展を目指す取り組みの先頭に立っておられたことです。京都府生協連合会の会長も務めておられます。まさに府民・市民の「生命と暮らし」を守る取り組みに、自らも関わってこられ、革新府政を守るために、杉村知事候補を応援される等、一貫して京都の革新候補を支持され、自ら行動の隊列に加わっておられました。晩年には、日本の平和と

民主主義をめざす京都懇談会呼びかけ発起人あるいは伏見平民懇代表世話人として、「平和と民主主義」の問題にも取り組んでおられました。

先生には、個人的著作のほかに編集監修されたもののが多々ありますが、「国民のための公衆衛生」といった視点から幾つかをあげれば、「人災と健康I」共編（光生館）、「老人問題の今後」編（ミネルヴァ書房）、「人々の健康と社会保障」共編（法律文化社）、「現代の地域保健I, II, III」監修（法律文化社）、「新労働科学論」監修（労働経済社）等があります。

なお、最後になりましたが、西尾先生のご趣味は“魚釣”です。お元気な頃は近畿一円各地にでかけ“釣果”を誇っておられました。今一つは、洋蘭の栽培で、定年で退官される折に門下生一同から贈られた温室で、ご自慢の作品を眺めて時に一献かたむけておられたこともあるか伺っています。先生は、お酒をこよなく愛しておられました。昔胃切除の手術を受けられそのおり血清肝炎にかかった経験を持っておられながら、少なからぬ量を嗜んでおられましたが、飲むほどに談論風発で同席の者を楽しませて下さいました。先生は意外に恐妻家でした。このことは知る人ぞ知るですが、先生の親しみやすいお人柄を偲ばせる隠れた一面でもありました。

西尾先生のご経歴やエピソードの一端を紹介しましたが、先生は「象牙の塔に閉じこもり只ひたすら真理探求の学究の徒」に留まることなく、研究の場を実験室から社会のなかに移され、さらには実践の場にも自ら足を踏み入れておられました。常に国民のための公衆衛生を目指して、府民・市民の協力を得て、革新府・市政を支える取り組みにも率先して参加されていました。西尾先生の様に幅広い活躍を展開してこられた大学人は他に類を見ることは少なく、また、言行一致の偉大なる存在だったと言えましょう。



## ～西尾雅七先生ご略歴～

京都大学名誉教授

専攻：公衆衛生学、社会医学

- 1909.12. 兵庫県多紀郡丹南町大山（丹波篠山）  
にて酒造家の七男に生る
1927. 3. 兵庫県立鳳鳴中学校卒業
1931. 3. 東京高等学校卒業
1935. 3. 京都帝国大学医学部医学科卒業
1935. 5. 医籍登録第78067号
1935. 4. 京都大帝国大学副手（衛生学教室）
1936. 7. 助手
1939. 9. 講師
1940. 3. 助教授  
39～44年に二度陸軍に召集、  
40～41年中国・東北地区等に出張
1945. 7. 医学博士
1949. 6. 京都大学教授、新たに設置された公衆衛生学講座を担当
1965. 8. 京都大学学生部長（→1966）  
この間、米、英、蘭、フィリッピン、  
タイ、オーストラリア、ニュージーランド等、各国へ出張
1973. 4. 定年退官

### 学会関係

1955. 社会医学研究会創設に参加
1961. 京都社会医学研究会を創設、代表となる（→1975）  
機関誌「社会医学研究」を発行（→1975）
1966. 日本学術會議会員（→1974）  
「学問思想の自由」委員会所属
1967. 日本衛生学会幹事長（→1973）  
たびたび学会を開催された  
日本公衆衛生学会・日本衛生学会・  
日本産業衛生学会の名誉会員

### 行政関係

- 1963.12. 京都市衛生研究所所長（→1964）
1968. 9. 京都市医療施設審議会会长（→ ）
1969. 8. 京都府医療機関整備審議会会长（→）
1970. 1. 京都府高齢者福祉対策協議会会长（→1976）
1971. 8. 京都市専門委員（→1981）
1973. 8. 京都府専門委員（→1976）  
京都府公害対策審議会会长（→1976）
1973. 8. 京都府衛生研究所所長（→1976）  
京都府公害研究所所長（→1976）
1974. 8. 京都市市民の健康と福祉に関する計画委員会座長（1977）
- 1977.10. 京都市地域保健・医療協議会会长（→1988）
1976. 4. 京都府公害衛生研究所所長（→1978）
- 1970.10. 京都府森永ひ素ミルク中毒追跡調査委員会委員長（→1975）
- 1974.11. 京都府森永ひ素ミルク飲用者認定委員会委員長（→1977）
1979. 財団法人ひかり協会副理事長（→1984）
1984. 8. 財団法人ひかり協会理事長（→1990）

### 労働衛生関係

1970. 労働安全衛生研修所設立発起人、呼びかけ人に加わる
1984. 京都府交通・労働等災害救済事業団理事長（→1990）

### その他

1975. 京都市市政研究会代表
1977. 憲法を暮らしに活かす民主府政を発展させる各界連絡会呼びかけ人
1981. 住民の暮らしを守る全京都学者・宗教者・文化人の会会長
1984. 京都府生協連合会会长  
日本の平和と民主主義をめざす京都懇談会呼びかけ発起人  
伏見平民懇代表世話人

## 第5回関東地方例会の報告

1994年3月19日（土）午後1時30分より6時、東京医科歯科大学難治疾患研究所において、表記の研究会が開かれ、25名の参加があり、活発な議論が行なわれました。演題は10題で、現場での実践のまとめ、調査報告、研究を重ねた結果など、別表のような様々な内容が発表されました。

石川氏（日野市地域ケア研）らは、日野で難病の在宅支援型中間施設を実践し、研究した成果について報告しました。

小澤氏（国立リハ研）らは、若年で発症したスモン患者の現在の実態を調査し、福祉施設はどうあるべきかを提起しました。

山本氏（深川保健所）らは、保健所のHIV抗体検査来所者に対する面接調査でわかった生活背景について報告しました。

片平氏（東医歯大）は3題続けて発表し、まず、「血友病患者にとり濃縮血液製剤は命綱だからHIV感染は止むを得なかつた」の説の誤りを血友病患者を対象とした匿名調査のデータなどをもとに指摘しました。次に、昨年起きたソリブジンの薬害で、添付文書の記載や新薬の開発承認過程の問題など、他の薬害発生とも共通する問題点があることを報告しました。さらに、総務庁の“医薬品の安全対策について”の行政監察による勧告の内容を紹介しました。

稻垣氏（城東保健所）らは、保健所実施の小企業検診で清涼飲料の摂取量が多い受診者がいる企業の労働環境について報告しました。

関谷氏（産業メディケア研）は、働くものの健康セミナーの内容と今後の方向性について報告しました。

横山氏（深川保健所）らは、就職し1年たった

保健婦として自分達が受けた教育を振り返り、教育のあり方について問題提起しました。

尾澤氏（根本産婦人科）は、宮本忍『社会医学』の現代的意義を産科学の立場からみて解明しました。

討論では、保健所問題について参加者で意見交換ましたが、どの課題も継続して論議していく重要性を確認して終了しました。

なお、終了後盛大に懇親会を持ちました。

### 一 第5回関東地方例会プログラム

- 1) 難病の地域ケア実践について  
石川 左門（日野市地域ケア研）ら
- 2) 若年発症スモン患者の問題と福祉（施設）対策について  
尾澤 温（国立リハ研）ら
- 3) HIV抗体検査来所者の性行動と生活背景  
山本 訓子（江東区深川保健所）
- 4) 濃縮製剤は血友病患者の「命綱」だったか？  
片平 別彦（東医歯大）
- 5) ソリブジン薬害の問題点  
片平 別彦（東医歯大）
- 6) 急がれる医薬品安全対策の改善・強化  
—「総務庁勧告」から考える—  
片平 別彦（東医歯大）
- 7) 小企業検診における飲料水摂取の実態  
稻垣 孝子（江東区城東保健所）ら
- 8) 働くものの健康セミナーの実施と評価  
関谷 栄子（産業メディケア研）
- 9) 現場から見た学校教育のあり方  
～就労後の1年をふりかえって～  
横山 弥生（江東区深川保健所）ら
- 10) 宮本忍「社会医学」（1936）—現代産科学の第一線医療の立場からみる—<第2報>  
尾澤 彰宣（根本産婦人科）

### ～ご案内～「保健所・公衆衛生を語るつどい」

地域保健法案が、国会に上程されていることは周知のことである。この法案策定の基になったのは、地域保健基本問題研究会の報告である。

ここに開催される、標記のつどいは、上の基本問題研究会が設けられたこと（平成5年1月）に対応して第1回を平成5年3月に開催し（大津市）、4月（尼崎市）、8月（松本市）、11月（北九州市）と過去4回を経過している。この間、2回にわたって地域保健問題に関する意見を公にしている。

右記のように、開催しようとする「つどい」は、第5回になるが、法案が通るか否か、通った場合、いかなる事態になるか、重要な時期であるので多数の参加者が期待される。

#### 記

一、日時：平成6年8月6日（土）

午後1時～5時

二、場所：「サンメンバーズ神戸」

新幹線 新神戸駅前

神戸市中央区熊内町4-13-21

TEL 078-251-1381

#### ＜呼びかけ人＞

- 小亀敬一（船橋保健所） 田中薰（土佐清水保健所）  
亀岡照子（西成保健所） 畑田一憲（田川保健所）  
小林美智子（伊那保健所） 南和子（平野保健所）  
佐藤文宣（多摩保健所） 白崎昭一郎（福井保健所）  
山本繁（尼崎市環境保健局）